

(仮称)

自然ふれあいの森

ニュースレター 第04号

平成15年1月25日発行 発行:「(仮称)自然ふれあいの森」管理運営準備委員会

管理運営準備委員会報告

第9回/平成14年11月30日(土) ワークショップ
第10回/平成14年12月21日(土) ワークショップ

冬の到来とともに寒さも厳しくなり、また、準備委員会発足から約半年の月日が流れ、準備委員会の活動自体を振り返るうえでもいい時期になったこともあり、11月・12月の2回の準備委員会は現地での4班に分かれ



ての活動を一呼吸おき、室内で全員が一同に会しての勉強会、ワークショップを中心に行いました。

まず、11月30日に開催された準備委員会では、私たちのお手本となるような他地域で森づくりを実践されているグループの活動事例報告や、現在4つの班でそれぞれ展開している活動を組み合わせることができるような新しい活動のアイデアなどが事務局側から紹介されました。これらの報告に対し委員の面々からは積極的な質問や意見が出され活気のある会となりました。

また、12月21日に行われた準備委員会では委員会発足時にも行った「森の中であなたがやってみたいこと」をテーマに話し合うワークショップを振り返りの意味も含めて再度行い



ました。約半年の間、現地をよく知るために道なき道に行くような探検を行ったり、現地を舞台に委員自らがホスト役になってのイベントを行ったりしてきたこともあり、委員から出された「やってみたい活動」はバラエティに富み、またそれぞれの意見が現地を知ったからこそだせるリアリティを強く感じるものでした。こうした意見を伺いながら半年間での委員の成長を感じるとともに、今後の準備委員会の活動に期待感を抱かせるワークショップとなりました。

「森の学校」第四回(全四回) 自然ふれあいの森

森と人との新しい関わり方を求めて

最後に少し大きな視点で考えてみたいと思います。自然とは何かを人は有史以来、模索し続けてきたといえます。自然の資源を採取して、自然環境に対し負荷を与えつつ文明社会を形成してきた中で、時代によって様々な問いかけがなされてきたのです。

特に、18世紀半ばに始まったとされるイギリスでの産業革命以降、今までにない都市の加速度的な拡大と過密化の中で、緑地空間の重要性が叫ばれるようになりました。都市内での緑地の確保は、当初、ロンドン等で王室や貴族の狩猟苑や庭園の一般開放からはじまり、パリの都市改造を手がけたオスマンが「都市の肺」と呼び、広大な都市近郊の森を位置付けたり、ドイツの美学者であるヒルシュフェルトが、あらゆる市民が自然を享受することができる場所として、フォルクスガルテンを提唱したりすることから、次第に都市公

園として展開されてきました。

現在では、大量の生産、消費、廃棄という構造をもつ社会において、サステナブル(持続可能な)社会のあり方が求められています。それを考えていくには、公園や緑地を単体で考えていくのではなく、我々の住む環境を全体として捉えることが必要なのです。それには、都市と森の接点空間すなわち、里山等の自然環境をどのように維持していくかが重要なのです。

「森の学校」での活動は、このような視点にメッセージを発信していくことができることも、目標の一つだと思います。

管理運営準備委員会委員 忽那 裕樹



